

## ソ連における現代漢語「是」の研究

川 上 久 壽

「是」は現代漢語で最も使用頻度の高い詞であるにもかかわらず、理論的に誰をも承服させるほど説得性のあるものはないし、実際の（教授上）にもしばしば教師に、少なくとも私などに、困惑を感じさせてきたものである。中国語学研究会編の『中国語学新辞典』（昭和44年、光生館）はわが学会の多数意見、或いは有力な意見を代表するものと思われる、国際的にはなおさらわが学会を代表するものとみられよう。したがって、まずこの辞典からみてゆくことにする。この辞典の“判断詞”の項目には次のような敘述がある。

“判断詞”〔判断詞・連結詞・繫合詞〕〔copula〕「判断詞は話し手が主題に対して強い関心をもって、ある判断をくだす時に用いられる語」と定義づけ、「是」の文法的特徴として次のものをあげる。

- (1) 単独で文をなし、問に答えることができる（「这是你的嗎？ 是。」）。
- (2) 否定には「不」を用い、肯定・否定の重ね方式で疑問を表わす。
- (3) 動詞の各種の変化形式をもたない。「是」には次のような用法がある。

1) a. 「我是好人。」

b. 「過魯南抗日遊擊區時，正是夏天。」

上文の「是」は、後続の名詞と合成謂語を構成し、aでは主題がどんなものかの判断を、bでは主題がどんな範疇に属するかの判断をしている。

2) a. 「他也是難受啊。」「誰也不是天生来就壞！」

b. 「天下是變了，變了！」「大哥！ 是發癡子吧？」

a・bにおける「是」と後続の形容詞・動詞とで構成された合成謂語は、主題に対してとくに強い関心をもって、その性状・動作を判断している。この場合「是」は重読される。

3) 「就是你胆子小!」:「是」が文頭にくる場合で(この例では、「是」の前にさらに「就」がある)、「就是」は「胆子小」を強調している。

4) 「说得是啊!」:文末にくる場合で、適正を表わしている。

5) 「街上全是泥。」:存在を表わす。

6) 「您就是这一句呀?」:主題(您)と謂語(这一句)とが同一でないが、これは中国語の簡素化された表現で“あなたは、それをいいなかったんだね”という意味。

7) 「汽車来来往往有的是, …。」:「有的是」は同様に使われる「多的是」とともに「多」の意味を表わす。

「是」は語法上“判断詞”のほかにも“繫詞”(王力《中国現代語法》)・“同動詞”(黎錦熙《新著国語文法》)・“動詞”(科学院語言研究所語法小組《語法講話》)などというとらえ方もあるが、これらはいずれも現象の説明に論理的難点をもっている。すなわち、“繫詞”は、用法3・4のように前か後かに連繫するものがないものの説明がむりになるし、“同動詞”(英語の“be”動詞)は、「是」の後に動詞がおかれる場合も多い中国語にはぴったりしない。「動詞」とする《語法講話》では、「是」の後の名詞・代詞を賓語としながら、後に形容詞・動詞がきたときには、「是」は「的確・確実」の意味だといっているだけで、それがどんな範疇に属するかはまったくふれていない。

以上が『中国語学新辞典』の判断詞にかんする記述である。これによると判断詞はそのあらゆる用法において変りなく常に判断詞であるという見解を筆者はもっているようである。この見解は学者間では多数意見かもしれない。なお『中国語学新辞典』では紙幅の関係からか(本来ならばこの辞典は「是」についてもっと多くのスペースをさくべきはずであった、と私は思う)「是」の用法についての記述が不十分なのは残念であった。したがって、この点においても、中国やわが国での研究成果はすでにご承知の方のためにソ連の研究を二篇紹介することにする。次に記すのはゾグラフ(и.т. Зограф)というひとの『中国語における補助詞「是」と「為」の繫詞的・非繫詞的機能』(『中国語と朝鮮語の言語学の問題』所収, レニングラード大学出版所,

1958年）という論文である。以下にそれがかかげよう。

1. 現代中国語の述語の型は基本的に二つに分けられる。ひとつは繫詞型、或いは名詞型（この型の特徴は繫詞「是」が必ずあることである）であり、もうひとつは、非繫詞型或いは動詞型（より正しくいえば、叙述型、というのは、この型の述語になるのは動詞だけではなく形容詞もなるから）である。

周知のとおり、繫詞述語の表語になるのはふつうは名詞か代名詞である。名詞、代名詞が表語になることはよく知られており、諸文献にも詳しく論じられている。

名詞的（繫詞的）述語の特殊なばあいとして“名詞—是—文”の構文がある。このばあい表語は、全く述語的な副文で表わされる。これは混成述語型（これについては以下で説明する）とは区別しなければならない。混成述語をもつ文で繫詞は語气的意味をもち、それがないと文のニュアンスは変る。“名詞—是—文”の構文では、「是」は絶対に不可欠である。なぜなら、その時に文は全体として意味を失うからである。この構文で「是」は副文を支配する。このとき副文は述語の表語となって主文の主語の意味を説明する。

党的紀律之一是少数服从多数。（毛澤東選集，第1卷，1951，94頁）

この型の文では「是」という繫詞をロシア語に訳すばあい色々にいえる。“СОСТОИТ В ТОМ, ЧТО”，“ЗАКЛЮЧАЕТСЯ В ТОМ, ЧТО”，“ТАКОВО”，また繫詞を翻訳するにはダッシュにかえることもできる。こういう構文の中国語では「是」の後に冒号をおく。上例で述語となる副文は主語をもつが、主語のないばあいもしばしばある。

文字改革仅仅是改革文字，並不是改革語言。（人民日報，1956年3月7日）

“中学生”月刊的主要任務，是帮助初中学生…學習文化科学知識。（中国語文，1952年，第8期，36頁）

副文に主語を欠くばあい、その文は見たところ混成述語をもつ単文に酷似している。両者のちがいは、述語となる副文の繫詞は必須であって、それ

なしに文は意味をなさないが、混成述語をもつ文では、以下で見るように、繫詞は語氣的性質をもつものであるから省くことができるところにある。

主語を欠く述語となる副文は不定形動詞の連語によりロシア語訳される。繫詞は“СОСТОИТ В ТОМ, ЧТОБЫ”, “ЗАКЛЮЧАЕТСЯ В ТОМ, ЧТОБЫ”, “ДАШЬ”などで表わされる。

この型の文では構成部分の順序を反対にできる。つまり、副文が最初にきて次に繫詞の「是」と名詞がくる。

你走自然是好事，可惜我不能一道去。(楊朔，三千里江山，北京，1955，49頁)

跟他們談話就是我的工作。(趙樹理選集，開明書店，1951，39頁)

2. しかし、中国語ではロシア語とちがって、繫詞は動詞述語にもついて、混成述語をつくる。混成述語には次の三つのばあいがある。述語に助詞「的」がつき、繫詞「是」を含む。述語に「的」がつくけれども、その前に繫詞がない。述語に繫詞「是」を含むが助詞「的」はつかない。

興味深いのは最後のばあいである。このとき「是」は繫詞的意味でなく語氣的意味をもつ。語氣的な「是」は次のような語氣的色彩を表わす。

a) 或る主張の正当さの確認

天下是变了，变了！（老舍，龍鬚溝，北京，1954，44頁）

b) 対比（しばしば讓歩的色彩をおびる）

我不是愁，我是恨啊！（楊朔，154頁）

这时人是回来了，可是身上糟踏得变了样子。(趙樹理，李家莊的變遷，新華書店，1949，71頁)

c) 話されたか或いは話されるだろうことにかんする何かの説明，（通常この色彩をロシア語に訳すのはむずかしい）。

小晚只当他是开玩笑。(趙樹理選集，125頁)

这事表明这些同志是受了资产阶级的很深的影響。(毛澤東選集，第3卷，874頁)

河对岸，…已經不響槍啦。估計，也許战斗是解決啦！（胡可，英雄的陣

地，北京，1953，52頁）

3. 文のはじめに「是」を用いるのは特殊なばあい、このとき「是」は基本的に説明的意味をもつ。「是」は独立した文のはじめにおかれて、二つの文をむすび、附属する補足文のはじめにたつ。

「是」が最初にある独立文は前文で述べられたことの理由を説明する。

姚芝蘭听到一陣沙沙声…是下雪了。（楊朔，127頁）

怎么这屋子这么熱？大概是窗戶沒有开。（曹禺劇本選，北京，1954，27頁）

「是」は二つの文をむすびつけることによって前述の構文におけると同じく、理由説明の意味をもつのがふつうである。「是」の後の文は「是」の前の文が述べたことの理由をしめす。この構文をロシア語に訳すには従属の理由をもつ複文による。この種の文では繫詞「是」は不可欠であって、複文の構成部分となる。したがって、「是」を取り除けば複文は二つの独立した文となる。かような複文では二つの部分は共通の主語をもつのがふつうである。

他特別着重地重复了这一句話，是怕自己的思路被人队里的声音打断了。（瞿秋白文集，第1卷，北京，1954，356頁）

上炕不脱鞋，必是袜子破。（諺語）

「是」の後の文は理由でなく目的を説明することもある。

他到这里来是看有什么輕便的能买个錢的零件…（草明，原動力，新華書店，1949，29頁）

「是」の後にある文のもつことのできる理由，目的の意味は専らコンテキストによるが，語法的に重要なことは，文の第二の部分では第一の部分で語られたことにつき何か説明していることである。

もしも「是」が附属の補足する文のはじめにあるならば，全体としての文の構造は二重となり，“動詞—是—文”と“動詞—是—単語（名詞或いは代名詞）”となる。いずれのばあいも附属の補足する文をもつ複文である。

中国語には談話，知覚，感覚，思考の特殊な動詞羣がある。（これらの

動詞の語法的特徴は文を賓語としてもてることである。

他說他明儿来。(ア・ア・ドラグノーフ, 現代中国語語法研究, 124頁〔原文〕)

中国語の附属の補足する文は形態化されていない, つまりこれに相応するロシア語とのちがいは従属接続詞(чтоのようなもの)がないことで, これは上例により明かである。

副文は主文の述語と附属の補足する文との間におかれる繋詞「是」によって特に区別できる。このとき繋詞は必須でなく(省略できる), したがってそれは語氣的(説明的)意味をもつ。

听见有人吵架, 有些人就跑出来看…鄰居們見是興旺弟兄們捆人, 也沒有人敢給小二黑講情。(趙樹理選集, 66—67頁)

あとの例で「是」のある文は前のコンテキストで語られたこと(街上で騒ぎは金旺と興旺が人を縛ったためにおきた)を説明している。

繋詞「是」の支配する附属の補足する文の後に説明されるものがくる例はおもしろい。

…王安福說是病了, 沒有去。(趙樹理, 李家莊…, 11頁)

この構文(“動詞—是—文”)で「是」のあるなしとは関係のない動詞自体がその後続く文を支配する。したがって「是」を取り除いても文は崩れないし, 説明の色彩を失うだけにとどまる。このばあいは“文—是—文”とはちがう, “文—是—文”では「是」自身が複文をつくるが, このばあい文は「是」なしでも複文であり, 「是」は補足の語氣的意味をあたえるにすぎない。

もし談話, 感覚, 思考の動詞の後にある「是」が副文を導入せず修飾語のあるひとつの単語(名詞 或いは 代名詞)であるとき, 繋詞「是」は強調的, 説明的意味をもつが, コンテキスト全体を説明するのではなく, 或るひとつの事物 或いは 人物でそれが前に提示されておらねばならず, 何か未知のものであってはいけない。

遠遠来了一个人, 走近了才認得是小福。(趙樹理選集, 43頁)

この文で最初に出てくるのは或る人のことであり、その後その人が誰であったかが明かにされる。

この型の文章をしらべてみよう。そのためはじめは繋詞のついたものを、後には繋詞を除いたものを見て、差異はどこにあるかを研究しよう。

繋詞のあるばあい

…認得是小福。

これは附属の補足文をもつ従属複文で、従属文は繋詞「是」と表語の小福からなる。上の中国語で副文には主語がないが、ロシア語では主語として это を入れ、「是」は繋詞（был, есть, будет）で訳す。

中国語とそのロシア語訳との相違は中国語の副文は形態化されていないが、ロシア語訳の副文では接続詞 что を用いて結びつける。

繋詞のないばあい

…認得小福。

これは小福が賓語となっている単文である。

したがって、繋詞「是」のある文は、表語（名詞述語）に主語のない副文をもつ複文である。これに相応する繋詞「是」のない文はひとつの単語（名詞か代名詞）による賓語をもつ単文である。これらの文には各種の使い方があつた。単文はふつうの事実の確認のばあいに用いられる。このような文で名詞の賓語はその場ではじめて話された物を指すのであつて、すでに提示された或る物を説明するのではない。複文が用いられるのは、物或いは人について前の文ですでに述べられており、いまはただ実際にその物が何であつたか、或いは誰であつたかを説明するときである。

談話、感覚、思考の動詞は附属し補足する文を支配するのとおなじく個々の単語をも支配する。したがって、繋詞「是」を除去することでは文全体が崩れないが、その構造は変化する。つまり附属の補足する文は名詞か代名詞の簡単な賓語によってとつて代られる。

「是」が純粹に繋詞的の意味をもつ文とは異り、以上で見た「是」は強調的繋詞的の意味をもつ、なぜなら並行する非繋詞的構造も可能だからである。

このような構文（構造からも意味からも）は中国語の繫詞「是」がさかのぼれば古代漢語の代名詞“これ”だったことであらうなずける。

古代漢語から附属の補足する文をもつものと現代の話言葉からそれに平行する文をあげよう。

a) …曰，是魯孔丘嚙？

b) …認得是小福。

古代漢語で「是」は文中の各種の場所に見当るが、この例で「是」の文中における位置は現代語の例とおなじく動詞と名詞の間である（“動詞—是一名詞”）。しかしこの二つの例で語法的性質は異なる。第一の文で「是」は指示代名詞で主語であるが、第二の文では主語のない繫詞文をつくる繫詞である。多分現代の構文は古代の構文に新たな意義があたえられて発生したものだらう。

4. したがって、現代中国語には「是」が文を支配するか或いはふつうの繫詞的意味をもたない次のような基本的構文がある。

1) “名詞—是—一文”。「是」が従属する述語文を支配する、この文は主文の主語の意味を説明している。「是」は繫詞であって、ロシア語に訳すと‘СОСТОИТ В ТОМ, ЧТО’, ‘ЗАКЛЮЧАЕТСЯ В ТОМ, ЧТО’, ‘ТАКОВО’ などになる。

2) “主語—是—述語”。「是」は、このばあい語氣的（強調的）意味をもつ。この意味はロシア語では‘ДЕЙСТВИТЕЛЬНО’ ‘ОПРЕДЕЛЕННО’ などに訳される。

3a) “文—是—一文” 或いは “是—一文”。「是」の基本的意義は理由の説明である。ロシア語には‘ТАК КАК’, ‘ПОТОМУ ЧТО’ と訳される。この構文の「是」は時として目的の説明を意味することができる。

3b) “動詞—是—附属の補足する文”。この構文は（次のものと同じく）談話，感覚，思考の動詞のとき可能である。「是」は語氣的意味をもち、それ以前のコンテキストで語られたことを説明するか或いは附属の補足する文を強調する。

3c) “動詞—是—単語（名詞か代名詞）”。「是」はコンテキスト全体を



説明するのではなく、以前に提示された物或いは人を説明する。このばあい「是」は本質的には繫詞であるが、同時に或る程度語气的意味もある。

以上がゾグラフの「是」について述べるところである。

鳥井克之氏は「是」には「《漢語》にあげた「特殊的用法」：適正・存在・譲歩の他に原因・理由を表わすことを補足説明する必要がある」（『中国語学』157, 1966年1月, 12頁）といわれているが、この重要な「是」の用法の補足拡充も『新辞典』には見えない。ゾグラフが理由ばかりでなく目的を説明するという用法のあることも指摘していることはすでに見た。動詞—是—従属文、動詞—是—単語という文型も教授上大いに役立つ。

しかし、ゾグラフの議論に異論を唱える人もソ連にはいる。それがコトローワ（А. Ф. Котова）というひとで、『現代中国語の補助詞「是」について』（『中国言語学の諸問題』所収、モスクワ大学出版所、1963年）という論文で多数派への反論を展開している。それは「是」の三つの形（肯定、否定、疑問）を考察しながら、補助詞「是」の表わす語気の性質、その統辞論的機能つまり補助詞「是」は文全体にかかわるのか或いは文の一部ないし若干の部分と結合するののかの問題、その語法的性質、つまり補助詞「是」は語気表現方法として繫詞性を保有しているか、或いはそれを喪失して助詞に移行したのか、という問題を研究して、繫詞としての「是」のほかに非繫詞的な「是」を助詞とみとめ、「是」の同一性を否認している。以上のようなわけでこの論争はレニングラード大学に対してモスクワ大学が反論を加えたという恰好にもなった。コトローワ論文の概要は次のとおりである。

繫詞としての「是」に否定形と疑問形があるように、非繫詞的な「是」にも否定形と疑問形のあることから「是」の三つの形を考察するわけであるが、まず、語気表現方法としての「是」（「不是」, 「是不是」）の機能分析とその表わす語気の性質を研究する。

a) 「是」（「不是」, 「是不是」）の位置の可能性。これをみるために、状語—定語主語—状語—述語—定語賓語という全成分の単文をとりあげて、次のように「是」の位置の可能性の図式をあげる。×は「是」を表わす。

1. ×状語—定語主語—状語—述語—定語賓語。
2. 状語—×定語主語—状語—述語—定語賓語。
3. 状語—定語主語—×状語—述語—定語賓語。
4. 状語—定語主語—状語—×述語—定語賓語。

賓語の前で補助詞「是」（「不是」，「是不是」）は非繫詞的（語氣的）作用はしない。たとえば、「我写信」であるが、「我写是信」とはいえず、「我写的是信」とならねばならぬ。

第二の位置の制限（被修飾語の前）も補助詞「是」の繫詞的機能とむすびついている。

「的」のつく定語であれば補助詞を定語と被修飾語の間に入れると、それは名詞＋繫詞＋名詞と考えることができる。たとえば、好的是書。

定語に「的」がないばあい、「是」を入れると「的」がつくようになる。言い換えると、繫詞の機能を果すばあい「的」は必ずつく。さもないと文は意味がなくなる。たとえば、好的是書在桌子上。第一の部分も第二の部分も完成した文である。

したがって、位置の制限は上述のすべての位置が補助詞「是」（「不是」，「是不是」）の繫詞的機能実現の可能性をうばうことを証明している。

これから具体的な言葉の材料を分析することにする。

小呉，是你回来了？ 是我。（人民文学，1951，№22）

この文で疑問を表わす基本的方法はイントネーションである。疑問文で疑問を表わすのは常に重読或いは特殊な補助詞である。この文で疑問の意味の中心になっているのは「你」である。それはその前にある「是」によって区別される。「是」がなければ疑問の意味の中心は「你」か「回来了」になる。しばしば重読は述語にある。するとこの文は次の訳になる。“呉君，きみは帰ったの”，その答は“そうだ”或いは“帰ったよ”。

したがって、文中に補助詞「是」のあるばあい文はただひとつの解釈をもつ、つまり、その前に「是」のある文の成分が意味の中心になる。したがって、「是」の役割はその前に「是」のある文の成分を区別することにある。

文の成分を区別するための重読も「是」も共に用いられている例をあげ

よう。

志剛你真地決定回鄉參加了農業生產了嗎？ 是真地決定了。（人民日報，1961年1月5日）

この疑問文で「真地」は重読で区別され、答では補助詞「是」の助けをかりている。

「不是」（「是」の否定形）のある文の例をあげる。你是要教訓我嗎？ 我不是教訓你（曹禺，日出，北京，1954，28頁）。ここで補助詞「不是」は複合述語の「要教訓」を区別する，答では「不是」が複合述語を区別し，否定の色彩をそえる。

疑問文で「不是」は区別の役割を果たしている，たとえば，太太，不是您吩咐過，叫我回去睡嗎？（曹禺）。

このばあいには区別と共に否定もあるから疑問文はロシア語で *ведь же, разве не*（全く，正に，ではありませんか）と訳されるような語氣的色彩をおびる。この色彩は否定形述語の疑問文にもあることに注意しよう。たとえば，你不去嗎？ きみはほんとは行かないのか。

したがって，「不是」は「是」と同じく疑問文ではまっさきに区別の方法であり，否定はそれに伴う機能である。

「是」の疑問形「是不是」の機能はどうか。

是不是木蘭叫你來說服我？（茅盾，清明的天，34頁）。

是不是現在就把詳細情形向你回報？（岳野，英雄司機，北京，1954，118頁）

咱們今天是不是殺人去？（張孟良）

「是不是」はまず第一に文の成分の前においてそれを区別し，同時にその疑問の性質により全文を疑問にかえこの文の成分を疑問たらしめる。

「是不是」はロシア語の疑問助詞 *ли* に似ている（むろん，それが区別する文の成分への関係上とる各種の位置は考えない）。他是不是去？ *Пойдет ли он?* 是不是他去？ *Он ли пойдет?*

中国語でもロシア語でも上記の助詞の代りに他の方法がある，重読がそ

れで、疑問の色彩はそのとき多少変る。

したがって、「是」が非繫詞的な働きをするばあい 区別の語気を示す方法となる。否定と疑問の形をとると、それは基本的な区別の機能とともに補足的な語氣的機能も果す。それは正しく上記の否定形と疑問形によって規定される。

統辞論的観点からすれば、「是」は文全体ではなく 文の個々の成分と関連する補助詞になる。

b) 補助詞「是」、「不是」、「是不是」の機能の若干の特徴。

「是」は指示代名詞「这」と結合する。

这是誰在那里唱呀？（茅盾）

你們这是由哪儿来呀？（張孟良，儿女风尘記）

老二这是吓唬我啊？（老舍）

機能上指示代名詞の「这」と「是」の結合は「是」だけと何の変りもない、つまり文の成分の前においてそれを区別する（第一例では主語，第二例では場所の状語，第三例では述語）。

ここでは補助詞「是」の役割の観点からみてその使用を過渡的なばあいとして規定できると思う、このばあい失われた繫詞性が不十分ながら存在し（指示代名詞「这」をその前に置くことができる）、それと同時にその繫詞的機能も外面に表われている。

述語の前に半実詞的な副詞「也」のあるとき補助詞「是」の機能を示す例をあげる。

爺爺不也是这么説他？（曹禺）。我在唱歌你不是也跟着我在唱嗎？（巴金）。你也不是不知道。（李国端）

三つの位置のヴァリエントがあることは明かである。

1. 不也是
2. 不是也
3. 也不是

第二と第三のヴァリエントには何の問題もない、第二では「不是」がそ

の後にくる「也」を区別し、第三では「不是」がその後の述語を区別する。

第一のヴァリエントの特徴は副詞「也」が否定詞と補助詞「是」の間に入ることである。

第一のヴァリエントの位置の構成は繫詞述語のとき同様のヴァリエントが存在することの原因となる。

他也是中国人。

他也不是中国人。

他不也是中国人。

繫詞述語のとき副詞「也」の前に否定詞を出せるのは中国語の否定詞が述語の直接前か或いは述語の修飾語の前にあるという一般的特徴により説明がつく。

補助詞「不是」の非繫詞的性質を示すために繫詞述語を修飾する副詞「也」のある文の例をあげる。你不是也是个四脚爬嗎？(巴金)

ひとつの文でいちどに二つの補助詞「是」を用いることができる(或いは補助詞「是」の二つの異なる形態)、たとえば、你不是娶媳婦呢，是取那点錢，对不对？(老舍)

上の例で補助詞「不是」と「是」がその前にある文の成分の間また複文の各部分の間には転折関係がある。これは「不是」と「是」の結合を転折接続詞とみなす根拠になる。が事情はすこしちがうようである。

補助詞「不是」と「是」が転折関係を表わすのは間接的にすぎない。その主な機能は区別にあり、対立する文の成分を区別する。

「是不是」と「是」はひとつの文の中で同時に用いられる、たとえば、我問你，你的錢是不是現在是在大豐銀行里？(曹禺)

この文では「現在」と「存在」の二つの単語が区別されており、「是不是」があるからこの文は疑問文である、したがって、補助詞「是」は文の個々の成分にかかわり文全体にはかかわらないという立論はもう一度証明される。

間接疑問を表わすために間接引用語に用いられるのが「是不是」の特徴

である。間接疑問はイントネーションによっても表わせるが、「是不是」に  
よることが屢々ある。

それはやはり「是不是」が文の個々の成分にかかわること、それが局  
部的に複文の一部を疑問にすることができること、たとえば、それは疑問助詞  
「嗎」のように疑問を表わすそういう方法を用いるときには不可能なこと  
によって説明される。たとえば、吳鐘一听说要走，就进来问是不是背行李？

したがって、「是」（「不是」，「是不是」）文の特定成分を区別（或いは強  
調）する方法となり、また統辞論の面では文の個々の成分（文全体ではな  
い）と関連した補助詞となる。「不是」と「是不是」のある文のもつ補足的  
語氣的性質はこれらの補助詞の否定的、疑問的性質によってつくられる。

語気表現方法としての補助詞「是」の使用は時として繫詞の「是」によ  
って制約される（或いはその影響の下にある）。

或る人々の著作では「是」の位置の可能性は「文のはじめ」と「述語の  
前」に限られている。

実際、「文のはじめ」ということは「是」の位置が文のはじめで状語の  
前と状語に先行する主語の前のばあいを含み、「述語の前」ということは「是  
の位置が述語の状語の前と直接述語の前のばあいを含む。

したがって、「是」の役割と意味を明かにするためには、その位置の可  
能性に正しい特徴づけをなすことが極めて重要である。

ゾグラフは動詞述語（形容詞述語にはふれていない）の前にある「是」  
はそれとともに混成型の「述語・体詞的述語」をつくるというが、もし「是」  
が動詞述語のときその直前にあるなら、そしてもし「是」と動詞述語の間に  
状語があれば、どういうことになるか見てみよう。你是明天起身嗎？

繫詞と名詞部分（表語）の間に状語がありえないことは周知のとおりで  
ある。

或いは、たとえば、「是」が文のはじめに直接あるのではなく状語の後  
にあるとすれば補助詞「是」の役割と意味は変化するか。

補助詞「是」の位置の可能性に誤った特徴づけをすると、しばしば合理

的解答を困難にする問題が生じる。

ついでコトワは「是」の同一性について以下のように述べる。

語法学者の多くは繫詞「是」がそのすべての機能において同一であること、つまり常に繫詞である、そういう意見に傾いている。これを自明となす人もいるし、とにかく証明ずみとなす人もいる。ここでは呂叔湘の意見（1956年第6号『中国語文』39頁）が研究対象になる。呂叔湘は「是」があらゆる機能で同一であるとみなす。ちょっと見るとこれには説得性があるかのようである、というのはそれが純粹に語法的規準を用いているからである。第一に「是」はそのあらゆる機能において否定形をとれる。第二に疑問形をとれる。第三に副詞修飾語をとる。第四に問にたいする答になる。まず第三と第四の規準の分析について述べよう。「是」が副詞修飾語をもてるといふことには疑問がある。呂叔湘は補助詞「是」の特徴について述べて、辞典的意味をもたぬという。そうだとすれば、それはすべての補助詞のごとく文の個々の成分の役割を果さないし、修飾語をもてない。

明かに呂叔湘はその意見を述べる時、就是，也是，总是のような結合を考えている。これらの「是」は八九分どおり造語成分とみなすべきである。これは副詞の造語語尾になっているか或いはそうなる傾向をもっている。

補助詞「是」は問にたいする答としても用いられる、たとえば、蕭先生要到她家里去嗎？ 是。（柔石）

呂叔湘は「是」がそれだけで文になれることを示して、その特徴を強調するため、この規準を出す。この議論には同意できない。答に用いる「是」は全く別な「是」である。それは単に素材として（発音と字の上で）補助詞の「是」と一致するだけで、「ええ」という意味で用いられる。したがって呂叔湘の第三、第四の規準は説得性に欠ける。では第一と第二の規準はどうか。

補助詞「是」が語氣的機能において否定形と疑問形をとれることには異論がない。しかしこの形は繫詞「是」の否定形と疑問形とは本質的にちがう、繫詞としての「是」と語氣的な「是」とは本質上異なるからである。

「是」は繫詞の機能をするとき「主語が或る範疇に属するか或いは主語を述語と同一視する」ことを表わす繫詞をおびた名詞述語をつくる。もし繫詞「是」が否定形と疑問形をとるとすれば、それは次のことを意味する。すなわち、主語と表語の間にできる関係、換言すれば否定性と疑問性は繫詞「是」と不可分であって、それらはひとつの全体であるという関係、それが否定されたり疑問とされたりするということである。

語氣的機能の補助詞「是」の否定形と疑問形では事情がちがう。

否定形の「不是」と疑問形の「是不是」はそれ自身では否定性と疑問性をもたらさない、なぜならそれらの意味は文或いは文の成分のうちに存在できないからである。外面的には「不是」と「是不是」に本質的とみえるような否定性と疑問性は実際にこれらの形式がそれと結合して機能する文の成分の語氣的意味から離れている。これによって語氣の働きをする補助詞「是」の否定形が否定性だけでなくロシア語で“ведь же”（そら、ではないか）と訳される語氣性をも表わす理由がわかる。

ゾグラフは補助詞「是」を繫詞としてのみ見るから、それに関連して非繫詞的機能で動詞述語の前にある「是」がこの述語を混成述語すなわち述語・名詞的に変えるとみなす。「他是走了」で「是走了」は述語・名詞的型の述語である。

この見解には多くの異論があろう。もし補助詞「是」がほんとに構成部分となって述語を構成し、同様にして体詞性合成述語を構成するとすれば、それは状語によって述語部分から分離されない。しかしいわゆる述語・名詞的述語にはその制限がない。たとえば、你是明天起身嗎？

「是」が混成述語の一部であるならば、この述語の否定形と疑問形は常に「是」をたよりにして作られねばならない（体詞性合成述語と比較せよ）、しかしそうはゆかないのである。補助詞「是」は述語の否定形にもつくことができる。たとえば、人家是不許我回去了？（巴金） 是治不了了？（曹禺）

述語の疑問形でも「是」は用いられる。你究竟是肯不肯？（吳組湘）

そのうえ否定形の「不是」は述語の否定形にもつく。たとえば、你自己



不是沒有了？（吳組湘）

「是」は語気と非語気の動詞からなる複合述語にもつく。たとえば、我是要離開这住慣了的小屋了（老舍）。

こういう型の述語をどう説明するのか。

さらにもうひとつ、区別の「是不是」は繫詞述語にもつくことができる（例は13頁を見よ）。以上の点から「是」を述語・名詞的述語をつくる繫詞とみなすわけにはゆかない。

ゾグラフは補助詞「是」を感覚、談話、思考の動詞の後における、つまりより正確には、これらの動詞の後につづくもの、すなわち従属文の前に置けることに注意する。たとえば、你說是劉秋子？（魯易） 我無論走到什么地方，我都覺得是在我自己的家里（巴金）。

第一例は筆者の意見によると、従属文は「是」とその後にくる単語からなる、つまり、これは主語「这」の省略された繫詞文である。ここで「是」はやはり語气的役割を果している、なぜならそれを省略できるからである。你说劉秋子？ 筆者の意見によると「是」の除去により文の構造は複文から単文に変わる。第二例で「是」は全文を区別し語气的説明的意味をもつという。この種の分析には同意しがたい。

第一に、どうして上にあげた文で「是」の役割が色々に理解されるのか。ひとつでは語气的色彩をおびた繫詞とされるのに、他のばあいは語気繫詞とされるのか。こういう扱いは論理的でない。第一例でも第二例でも補足的な従属文はその成分で差異があるだけである。すなわち、第一例では文のひとつの成分、第二例では拡大された成分からなる。原則的に補助詞「是」をおくことができるのは、上述の動詞の後に補足の従属文がつづくばあいだけであって、単に賓語がくるばあいではない。筆者はどうか「是」を入れることによってこういう文ができ、なお主語の省略された文ができると考えている。しかし、「是」がほんとうに繫詞だとすれば文の構造は変わるだろう、你说的是劉秋子？ つまり、動詞には必ず「的」がつかねばならない。動詞に「的」がつかずにいるということは「是」がこのばあい繫詞とし

てでなく区別的に用いられているからである。

かくて補助詞「是」の位置の可能性、その機能と意味の考察、さらに他の研究者の若干の論文の研究によって、次のように結論できる。繫詞「是」はその意味、機能、位置からいつでも語気を表わす方法としての補助詞「是」とは同じでない、つまり繫詞の「是」と補助詞の「是」は語法的性質上異なるということである。

繫詞「是」と補助詞「是」という意味の下にわれわれは何を理解するか、両者間の差異はどこにあるのか。繫詞「是」は一定の辞典的意味“「…である」”をもっている。補助詞「是」には一定の辞典的意味がない。補助詞「是」の語法的意味はそれを含む構造の意味から引き出すことができる。それは区別（「是」にとって）、区別+否定（「不是」）、区別+疑問（「是不是」）である。

すでに見たように繫詞「是」と補助詞「是」の意味は同じでない。さらに繫詞の機能の観点からすれば名詞述語の構成部分である。補助詞「是」は形成要素として文の成分になる。相違点はどうか。もし繫詞を除けば文の成分（述語）は破壊される。もし補助詞「是」を除けば文の成分はそのまま、ただその語气的色彩だけが変わる。そのほかに、繫詞「是」が述語の構成部分になるとすれば、補助詞「是」にはそういう制限がない。それは述語にも、主語にもその他の文の成分にもつくことができる。

したがって、現代中国語には繫詞の「是」と補助詞の「是」がある。しかし、補助詞の概念を正しく証明するものはない、この概念には単語の各種の範疇が入るからである。

単語のどういう範疇に「是」を関係づけられるか。その基本的な語法特徴によれば、助詞の部類にそれを入れることができる。しかし、助詞の「是」を文末の助詞「嗎」や「啊」と区別せねばならない。もし後者を全文に関連する統辞論的形成要素とするならば、「是」は文の成分の形成要素である。

多少省略したが、以上がコトワ論文である。「是」についてはわが国でもさらに論議がたたかわされてよい気がする。